

## 公開講演会「仏日における国際日本学の研究動向と今後のゆくえ」

主催：早稲田大学高等研究所

共催：早稲田大学総合人文科学研究センター・研究部門「角田柳作記念国際日本学研究所」

後援：早稲田大学総合人文科学研究センター・研究部門「トランスナショナル社会と日本文化」

日時：2021年7月10日(土)10:00～12:30

場所：zoom 開催

司会：谷口眞子（早稲田大学文学学術院教授）

10:00～10:10 開会の挨拶と趣旨説明（早稲田大学文学学術院教授 谷口眞子）

10:10～10:50 「フランスにおける国際日本学の現状とリール大学での取り組み」  
（リール大学教授 ベルランゲ河野紀子）

10:50～11:00 休憩

11:00～11:30 コメント「日本における国際日本学の現状と早稲田大学での取り組み」  
（早稲田大学文学学術院教授・早稲田大学総合人文科学研究センター  
所長 河野貴美子）

11:30～12:25 討論

12:25～12:30 閉会の挨拶（谷口眞子）

2021年7月10日(土)10:00より、リール大学教授のベルランゲ河野紀子氏を講演者に、早稲田大学文学学術院教授で総合人文科学研究センター所長の河野貴美子氏をコメンテーターにむかえ、公開講演会「仏日における国際日本学の研究動向と今後のゆくえ」を開催した。司会は早稲田大学文学学術院教授の谷口眞子がつとめた。

本企画は、2021年度早稲田大学高等研究所訪問研究員として来日されたベルランゲ河野紀子氏の業務の一環として開催されたもので、早稲田大学高等研究所主催、総合人文科学研究センター研究部門「角田柳作記念国際日本学研究所」共催、総合人文科学研究センター研究部門「トランスナショナル社会と日本文化」後援で行われた。

ベルランゲ氏は日本人として日本の大学を卒業後、渡仏して30年近く日本学で教鞭をとってきた。そこで「フランスにおける国際日本学の研究動向と今後のゆくえ」と題して、フランスにおける日本学をめぐる教育体制、研究状況、リール大学での取り組みについてお話ししていただいた。

氏は、フランスにおける教育・研究環境について概観し、日本学がどこでどのように行われているのかを説明したあと、リール大学における取り組みについても言及した。フランスではナショナルな意識が強く、「文学」「歴史」などはフランス文学、フランス史を指してお

り、非ヨーロッパ世界の研究と区別されていること、日本に関心を持つ学生が増加しているにもかかわらず、伝統的な学問領域の教員数が確保されているため、日本学の専門家が参入するのは難しい状況にあること、日本単体ではなくアジア研究の一環として共同研究が行われている現状を報告した。また、イナルコの初代日本学教授であったレオン・ド・ロニーについて、『ヨーロッパにおける日本学の源流 レオン・ド・ロニー文庫を巡って』(Presses universitaires du Septentrion、2020,318 p)が出版されたことにもふれた。

次に総合人文科学研究センター所長をつとめる河野貴美子氏から、コメントを得た。河野氏は日本における国際日本学の現状について、大学における国際日本学部の出現や2017年に国際日本文化研究センターをまとめ役として発足した「国際日本研究」コンソーシアムについて説明し、何をもちいて国際日本学とするのか、方法や言語をどうするのか、誰に向けて行うのかなどが課題になっていることをあげた。早稲田大学での取り組みについてはスーパーグローバル大学創成支援事業早稲田大学国際日本学拠点や角田柳作記念国際日本学研究所の設置、文化構想学部 JCulP (国際日本文化論プログラム) と大学院文学研究科国際日本学コースの設置などを紹介した。

討論から、「国際」「日本」という言葉を冠するものの、仏日には教育・研究をめぐり大きな制度的違いがあり、国際日本学が置かれた環境も異なること、フランスでは現代社会の諸課題をとりあげる側面が強く、それが日本学にも反映されていること、日本のサブカルチャー人気は高いが、就職に有利な中国語が日本語より重視されるようになってきたことなどがうかがい知れた。日本近現代史、歴史社会学、比較政治史を専門とする立場から、フランス内での教育行政を含めた国際日本学の学問的位置について現状を聞き、討論の場が設けられ、今後の早稲田大学における国際日本学のあり方を考える上でも良き機会となった。

[報告・谷口眞子 (文学学術院教授) ]